

第9章 指示詞

この章ではこの言語の指示詞を扱う。構成は以下のとおりである。

- 1 指示詞の概略
- 2 近隣の言語の指示詞と先行研究における記述
- 3 指示詞の形態論的、統語的機能
 - 3.1 指示詞が単独で用いられる場合
 - 3.2 指示詞が形成する複合語
- 4 指示詞の用法（意味）
 - 4.1 場面指示における用法
 - 4.2 ときを表す用法
 - 4.3 文脈指示的用法
 - 4.4 TAの物語における用法
 - 4.5 個々の指示詞の機能
- 5 まとめ

1 指示詞の概略

スンバワ語の指示詞には次の5種類がある。

ta 「近称」：指示物が基準点（通常は話者）の近くにあることを示す。

nan 「中称」および「定」：場面指示においては指示物が基準点から中程度の距離にあることを示す。また、その他の環境では定性を示す。

tó' 「現場指示」：指示物が発話時点、地点を含む場面にあることを示す。

ana 「遠称」：指示物が基準点から遠くにあることを示す。

mé 「不特定」：話者が特定することができない領域を示す。

これらの指示詞は語形成および統語的ふるまいに関して多くの特徴を共有しており、指示詞という文法的カテゴリーを形成している。指示詞は単独で用いられる場合と名詞節形成詞や前置詞などと複合語を形成する場合がある。単独で用いられる場合は、副詞に類似した機能を持つが、語順に関して部分的に一般的な副詞とは異なるふるまいを示す。また、名詞節形成詞や前置詞句と複合語を形成する場合も一般に用言が持つ機能と体言が持つ機能を併せ持つような特殊なふるまいをする。

2 近隣の言語の状況と先行研究における記述

指示詞に関して、スンバワ語は近隣の言語（バリ語、マレー語など）とやや異なる特徴を示す。

スンバワ語では、話し手からの距離を積極的に示す指示詞が三種類あり、近称、中称、遠称の三つが区別される。一方、バリ語の指示詞は近称および非近称の二種類のみの対立を示す。

・バリ語の指示詞

	近称	遠称
普通体	<i>ené</i>	<i>ento</i>
丁寧体	<i>niki</i>	<i>nika</i>

また、マレー語の指示詞は場所を指す形に関しては近称、中称、遠称の三種類の対立を示すが、それ以外の事物を指す形に関しては近称および非近称の二種類の対立のみを示す。実際の形を以下に示す。（場所を指す形中の*di*は場所の前置詞である。）

・マレー語の指示詞

	近称	中称（定・聞き手から近い領域）	遠称
場所を指す形	<i>di sini</i>	<i>di situ</i>	<i>di sana</i>
それ以外の事物を指す形	<i>ini</i>	<i>itu</i>	<i>itu</i>

また、スンバワ語の*tó*「現場指示」に対応する形は他の言語には見られない。

第1章4で述べたように、この言語の先行研究として、インドネシア教育文化省が出版した文法書Sumarsono他(1986)と辞書（スンバワ語-インドネシア語辞書）Sumarsono他(1985)がある。

本稿で指示詞として扱う形の機能に関して、上記の文法書には統一的な記述はみられない。辞書においては、本稿で指示詞として扱う形、およびそれを含む複合語の一部がエントリーとして扱われている。個々の定義は以下のとおりである。（日本語訳は筆者による。）対応するインドネシア語の単語があてられているだけの不十分なものではあるが、ここでこの定義と本稿で筆者が行う分析との間に矛盾はみられない。

<i>ta:</i>	1. <i>ini</i> 「これ」「この」、2. <i>sini</i> 「ここ」、3. <i>begeni</i> 「このように」
<i>nan:</i>	<i>itu</i> 「それ」「その」
<i>tó:</i>	1. <i>itu</i> 「それ」「その」、2. <i>situ</i> 「そこ」、3. <i>sana</i> 「あそこ」
<i>ana:</i>	1. <i>itu</i> 「それ」「その」、2. <i>sana</i> 「あそこ」
<i>mé:</i>	<i>mana</i> 「どの」

3 指示詞の形態論的・統語的機能

指示詞は単独で文の構成要素、あるいはその一部として機能する場合と、他の形態素と複合語を形成する場合がある。それぞれの場合を3.1と3.2に分けて述べる。

3.1 指示詞が単独で用いられる場合

この場合指示詞は次の[1]-[3]の機能を持つ。

- [1] 単独で文の副詞成分として機能する。
- [2] 述部の主要部として機能する。
- [3] 名詞句、副詞句内の修飾成分として機能する。

以下の部分ではそれぞれの場合について述べる。

[1] 単独で文の副詞成分として機能する

(1)は*ta*「近称」、(2)は*tó'*「現場指示」の例である。ここでは、指示詞は場所、様態を含めた状況の全体を指す。(日本語の「ここで」と「このように」の両方に相当する内容を表す。)

- (1) *ta ya=ku=mópó' aku.*
 this CONS=1sg=laundre 1SG.LOW
 「ここで(このように)私は洗濯をするつもりである。」

- (2) *tó' ada' pio.*
 there exist bird 「そこに鳥がいる。」

(1)(2)において、指示詞*ta, tó'*は副詞成分として機能している。

5つの指示詞のうち、*mé'*「不特定」は、この環境に現れることがない。(単独で副詞成分として現れることがない。)

- (3) **mé sia=mópó'?*
 how 2SG.HIGH=laundre
 (期待される意味)「どこで(どのように)あなたは洗濯をしますか。」

「どのように」「どこで」という内容は、指示詞*mé'*「不特定」と抽象的な指示対象を持つ名詞*lók*「方法」、*pang'*「場所」を主名詞とする名詞節を並置した等位文の形で表される。(この種の構文については下の[2]で扱う。)

- (4) *mé [lók sia=mópó']*
 how way 2SG.HIGH=laundre
 「あなたはどのようにして洗濯をしますか。(lit. あなたが洗濯をする方法は、どんなふうですか)」

- (5) *mé* [pang' sia=mópó']
 how place 2SG.HIGH=laundry

「あなたはどこで洗濯をしますか。(lit.あなたが洗濯する場所はどこですか。)」

[2] 述部の主要部として機能する。

指示詞は単独で述部を構成する。

- (6) *ta* [cara].
 this way

「方法はこうだ。(こうするんだ。)」

- (7) *ta* [léng nya].
 this words 3

「彼のことはこうだ。(彼はこのように言った。)」

この場合、抽象的なことがらを示す名詞を主要部とする名詞句、または名詞節が補語として現れる。

この位置に現れる名詞には(6)の*cara*「方法」や(7)の*léng*「ことば」の他に、*lók*「方法」、*rua*「外見、様態」、*pang'*「場所」、*dengan*「連れ」などがある。

第8章3で述べたように、この種の抽象的なことがらを示す名詞はその内容を表す文と名詞節を形成しうる。指示詞はそのような名詞節を補語とする文の述部となることが多い。(8)-(10)は、そのような例である。(8)では*lók*「方法」が、(9)では*rua*「みかけ」が、(10)では*pang'*「場所」がそれぞれ名詞節の主要部となり、それぞれ文による修飾を受けている。

- (8) *ta* [lók mongka' nya]
 this way cook.rice 3

「彼はこのようにご飯を炊く。(ご飯をたく方法はこのようだ。)」

- (9) *ta* [rua ku=balangan].
 this appearance 1SG.LOW.AFFIX=walk

「わたしはこんなふうに歩く。(私が歩く様子はこんなふうだ。)」

- (10) *ta* [pang' maté nya].
 this place die 3 「彼が死んだ場所はここだ。」

第5章5で述べたように、名詞、副詞などが述部の主要部である場合、述部と主格補語との語順には制約がない。述部は補語の前に現れても後に現れてもよい。(11)(12)は名詞*guru*「先生」が、(13)(14)は副詞*mèsa-mèsa'*「一人ぼっちである」がそれぞれ述部の主要部であ

る場合である。いずれの場合も述部が先行する語順、補語が先行する語順の両方が許容される。

- (11) *guru nya.*
teacher 3 「彼は先生である。」
- (12) *nya guru.*
3 teacher 「彼は先生である。」
- (13) *mèsa-mèsa' nya.*
alone 3 「彼はひとりぼっちである。」
- (14) *nya mèsa-mèsa'*
3 alone 「彼はひとりぼっちである。」

それに対して、指示詞から成る述部は常に補語の前に現れる。たとえば、(6)(7)に対応する(15)(16)のような文は容認されない。この点で上記の構文は、副詞や名詞を述部の主要部とする文とは異なる性質を持つ。

- (15) *[*cara ta.*
way this
(期待される意味)「方法はこちらだ。」
- (16) *[*léng nya ta.*
words 3 this
(期待される意味)「彼のことはこうだ。(彼はこう言った。)」

[3] 名詞句、副詞句内の修飾成分として機能する。

指示詞は名詞句内で主名詞に後続し、修飾成分として機能する。このとき指示詞は主名詞と強勢の単位を形成し、名詞句全体が一つの単語のように発話される。この点で指示詞はこの言語の動詞、副詞、固有名詞、および1人称代名詞と同様のふるまいをする¹。(この

1 名詞が動詞、副詞、固有名詞、1人称人称詞によって修飾されている例をそれぞれ以下に挙げる。名詞が(a)のように動詞に修飾される場合、(b)のように副詞に修飾される場合、(c)のように固有名詞に修飾される場合、(d)のように1人称人称詞に修飾される場合、主名詞と修飾する要素は強勢の単位を形成する。

- (a) *lamong=mira*
clothes=red 「赤い服」
- (b) *pipés=sapèrap*
money=yesterday 「昨日のお金」

点については第2章3.1で既に述べた。)

- (17) *tóde=ta*.
 child=this 「この(このような)子ども」

[1]-[3]の統語的機能から、指示詞は副詞に類似した機能を持つといえる。ただし、[2]述部の主要部として機能するとき、常に文の先頭に現れるという点で、一般的な副詞とは異なるふるまいを示す。

3.2 指示詞が形成する複合語

第4章2.5.2で述べたように、指示詞は次の要素と複合語を形成する。

- [1] 名詞節形成詞 *dè* (第5章8.1)
 [2] 前置詞 *kó'* (第5章6.3.2)
 [3] 鼻音前置詞 *N* (第4章1.3、第5章4)

第4章で挙げた表4-1を表9-1として再掲する。いくつかの形においては不規則な対応が観察される。(不規則な形を太字で示した。)

表9-1 指示詞が形成する複合語

	<i>ta</i> (近称)	<i>tó'</i> (中称)	<i>nan</i> (中称)	<i>ana</i> (遠称)	<i>mé</i> (不特定)
[1]	<i>dè-ta</i> この	<i>dè-tó'</i> その	<i>dèan</i> (< <i>dè</i> + <i>nan</i>) その	<i>dèna</i> (< <i>dè</i> + <i>ana</i>) あの	<i>dè-mé</i> どの
[2]	<i>kó-ta</i> ここへ	<i>kó-tó'</i> そこへ	<i>kó-nan</i> そこへ	<i>kóna</i> (< <i>kó</i> + <i>ana</i>) むこうへ	<i>kó-mé</i> どこへ
[3]	<i>n-ta</i> ここで	<i>n-tó'</i> そこで	<i>ninan</i> (< <i>N</i> + <i>nan</i>) そこで	<i>nana</i> (< <i>N</i> + <i>ana</i>) むこうで	--

[1]は名詞として機能し、具体的な指示物を指すのに用いられる。

- (18) *dèta guru=kaku*.
 this teacher=1SG.LOW.GEN 「これは私の先生だ。」

- (c) *tau=Jepang*
 person=Japan 「日本人」

- (d) *anak=kaji*
 child=1SG.HIGH 「私の家」

一方、(e)のように名詞が名詞に修飾される場合は、修飾成分と主名詞は別々の強勢の単位を形成する。

- (e) *pipés tau=nan*
 money person=that 「その人のお金」

[2][3]の形は、一般的な前置詞句と同様の機能を持つ。*kó'*との複合語は方向を、鼻音前置詞との複合語は場所を表す。

(19) *nya datang kóta.*
3 come here 「彼はここに来た。」

(20) *nya tedu nta.*
3 stay here 「彼はここにいる。」

この言語では、一般に、名詞句形成詞に名詞が後続することはない。また、前置詞に後続するのは名詞だけで、動詞および副詞が前置詞に後続することはない。このことから、指示詞は語形成の面で名詞とも、動詞、副詞とも異なるふるまいをするといえる。

4 指示詞の用法（意味）

ここでは、指示詞の用法について述べる。4.1では場面指示の用法を、4.2では文脈指示の用法を、4.3では「とき」を指す用法について扱う。さらに4.4では指示詞*ta*の物語中における特殊な用法を扱う。その後、4.5で個々の指示詞の機能について包括的な考察を行う。

既に示したように、指示詞には*ta, tó', nan, ana, mé*の5種類がある。それぞれの指示詞は単独で文の構成要素（副詞成分または述部）を構成する場合と、名詞句の構成要素、あるいは複合語の一部となる場合があるが、以下で述べる個々の指示詞の用法は、原則として上記の指示詞の現れる統語的、形態論的環境すべてを通じて観察される事柄である。

以下の記述では、個々の指示詞が単独形成する文成分、および指示詞を含む要素（名詞句、副詞句、複合語）をまとめてTA, TÓ', NAN, ANA, MÉと標示することにする。（たとえば、TAは、指示詞*ta*が単独で構成する成分、*ta*を含む名詞句（例：*tóde=ta*「この子」）、およびTAを含む複合語（表9-1の*dèta*、表2の*kóta, nta*）のすべてを指す。）

4.1 場面指示における用法

第1節で、各指示詞の発話場面における指示範囲の概略を述べた。ここでは、それぞれの指す領域をさらに詳しく述べる。それぞれの指示詞が指す領域は以下のとおりである。

表9-2 指示詞の場面指示における指示範囲

		TA	TÓ'	NAN	ANA
近	話者に接する領域（身体、衣服、携帯物）		×	×	×
	話者から手の届く範囲				×
	発話の場から十分遠いと認識される領域	×			
遠	発話の場から見えない領域	×	×	×	

9.4 指示詞の用法（意味）

TAは話し手自身を中心に、ほぼ話し手から手の届く範囲を指す。

ANAは話し手、聞き手から見えない領域を含め、比較的遠い範囲を指す。

NANは、発話の場から見える領域のうち、話者に直接接する領域（衣服や携帯物）を除く部分を指す。

TÓ'は、話者に直接接する領域を除く、話者に比較的近い領域から、話者から中程度の距離にある領域を指す。TÓ'による指示を行う場合、話者は「ほらそこに」という指差しを行うことが多い。

上の表に示したように、それぞれの指示領域には一部重複が見られる。つまり、話者に直接接する領域（衣服や携帯物）は常にTAによって指示され、発話の場から見えない遠い領域は常にANAによって指示されるが、それ以外の範囲に関しては、NANまたはTÓ'との指示範囲の重なりがある。

MÉは話者によって特定されていない領域を指す。MÉは通常その不特定な領域を特定するための情報を聞き手に求める発話に用いられる。

- (21) *dè=mé* *dè=balong*.
NOM=how NOM=good 「どれがいいの？」

MÉが用いられるのは、その指示物がいくつかの限定された選択肢の中にあることを話者が認識している場合である。たとえば、上の(21)のような文は目の前にある複数の選択肢の中から聞き手に選択を求めるのに用いられる。そのような選択肢の限定がない場合は(22)のように疑問名詞*apa*「何」が用いられる。

- (22) *apa* *dè=balong*
what NOM=good 「何がいいの？」

4.2 「とき」を表す用法

五つの指示詞はいずれも単独で、または、ときの単位を表す名詞を修飾して副詞句を形成する。

TAは、期間を表す要素の修飾成分として現れ、発話時点を含む時間の範囲を指す。

- (23) *anó=ta*
day=this 「今日」

- (24) *bulan=ta*
month=this 「今月」

ANAは期間を表す要素の修飾成分として現れ、発話時点から遠い過去の時点を示す。

- (25) *saman* *dunóng=ana*
days before=over.there

「昔々（物語などの語りだしに用いられる）」

- (26) *tén=ana*
 year=over.there 「（かなり以前の）あの年」

TÓ'は常に単独で現れ、発話時点（日本語の「今」に相当する内容）を指す。

- (27) *tó' nan na, ada' manjéng m=balé=nan, laló mo.*
 now that you.see exist girlfriend at=house=that go MM
 （男女交際に遠慮があった昔と対比して）
 「今は、あれね、恋人が家にいたら、（そこに）行ってしまおう。」 [PA 055]

- (28) *kira-kira umér sia pida mo tó', pén?*
 about age 2SG.HIGH how.many MM now grand.parent
 「年はだいたいいくつくらいなの、今、おばあちゃん？」 [PA 130]

NANは期間を表す要素の修飾成分として現れ、言語内、言語外的な文脈から聞き手にとって特定可能であると考えられる時点を表す。

- (29) *muntu tama nerok dunóng=nan, saman PKI=nan?*
 when enter election before=that time PKI=that
 （話題となっているある時点について）「選挙が入ってきたとき、そのPKI(政党名)の時代？」 [PA 132]

MÉも期間を表す要素の修飾成分として現れ、話し手が特定できていない時点を表す。

bulan=mé 「どの月」
jemat=mé 「どの週」

ただし、MÉは、それが指示する時間的単位の候補が、言語的、言語外的情報からある程度限定されている場合に用いられる。そのような限定がない場合は、疑問副詞*pidan*「いつ」や、疑問名詞*apa*の句(例：*bulan=apa*「何月」)が用いられる。

4.3 文脈指示的用法

5つの指示表現のうちTA「近称」とNAN「中称」およびMÉ「不特定」は、当該の発話を含む一連の談話中の部分を指す用法、いわゆる文脈指示の用法を持つ。TÓ'「現場指示」、ANA「遠」は文脈指示の用法を持たない。以下の部分ではTA「近称」とNAN「中称」およびMÉ「不特定」の文脈指示用法について述べる。

4.3.1 TAの文脈指示的用法

TAは、その発話を含む一連の談話や、これから発話される内容を指す。

(30)では、指示詞は当該の発話を含む談話全体を指している。

- (30) *nongka terbayang pang' até ina=ta*
 NEG.past imagined at emotion mother=this

lók ya=motóng anak, sjar tutér, tutér tau=sapuan dèta.
 NOM CONS=burn child because story story people=long ago this

(これに先行する部分で、「母親」は、子供の頭の虱を取るために、子どもの頭を焼こうとした。それを受けて)「母親は、子どもも燃えてしまうということは考えもしなかった。というのも、(この部分を含む物語全体を指して)これはお話だから、昔の人のお話だからね。」 [Si Mina 009]

(31)において、(a)に現れている指示詞TAは当該の発話に続く発話(b)の内容を指している。

(31)

- (a) *dadi ta lók léng bléng datu=ta,*
 then this way words say headman=this
- (b) *'tó', ku=prènta nèné laló sama srang,*
 now 1SG.LOW.AFFIX=command 2-3PL go together fight
- srang tentara portugis=ta pang' tana=Samawa=ta,*
 fight army Portuguese=this at land=Sumbawa=this
- pang' labu=Samawa=ana.*
 at harbour=Sumbawa=that

(a)この侯は(部下に)このように言った。

(b)「今、私はおまえたちに、共に戦いに行くように、ポルトガル軍と戦うように命令する。このスンバワの地で、あのスンバワ港で。」 [DPG 011]

4.3.2 NANの文脈指示的用法

NANは、その指示対象が、既に談話内に導入されている場合に用いられる。

(32)(33)は、会話の例である。いずれの例においてもNANは先行する発話内で言及された事物を指している。

9.4 指示詞の用法（意味）

(32) (祖母と孫の会話で、(a)は祖母、(b)は孫の発話。家系の話をしている。)

(a) *berarti papén=Ali ké' Papén=Koa sempu=dua si?*
it means grand parent=Ali and grand parent=Koa cousin=two MM

(b) *a.a. papén=Aras papén=selaki=ta, basempu-sai ké' Koa ké' Ali*
yes grand parent=Aras grand parent=male=this be cousins with Koa with Ali
apa nan sempu=sai' tau=nan.
because that cousin=one people=that

(a) 「（先行する話を受けて）ということは、アリおじいちゃんとコアおじいちゃんもまたいどこ？」

(b) 「うーんと、アラスおじいちゃん、このおじいちゃん（語り手の夫）はね、コアおじいちゃんとも、アリおじいちゃんともいどこだよ、それだから、その人たち（アリおじいちゃんとアラスおじいちゃん）はいどこだよ。」 [PA081-082]

(33) ((a)は祖母、(b)は孫の発話。昔の学校の話をしている。)

(a) *guru tu=bóé mo ka=maté guru=Tojang, guru=Indéng*
teacher 1PL.AFFIX=gone MM PERF=die teacher=Tojang, teacher=Indéng

(b) *tau=Empang dèan?*
person=Empang that

(a) 「私たちの(小学校時代の)先生はもう皆亡くなってしまった。Tojang先生 ,Inding先生.....」

(b) 「それは、Empang出身の人？」 [PA029]

前項4.2の「ときを表す用法」でも扱ったように、*NAN*は、指示対象が先行する文脈によって導入されているわけではなく、聞き手との間で共有されている一般的な知識から特定可能な事物を指す場合もある。

(34)では川を指示する名詞句が二つ現れており、いずれにおいても*nan*が現れている。この名詞句は先行する文には現れていないが、話者は聞き手との間で共有されている近隣の地理に関する知識から、指示対象の川が聞き手にとって特定可能であると想定していると考えられる。

(34) *jarang ada' sumér apa*
rarely exist well because
rua berang tu=turés,
I think river 1PL.AFFIX=often go somewhere
lamén nó brang=nan, brang=Peria=nan.
if NEG river=that river=Peria=that

9.4 指示詞の用法（意味）

「（昔は）めったに井戸はなかったから、私たちはしばしば川にいった。**その**川でなかったら、**その**ブリア川にね。」 [PA048]

以上述べてきたことから、文脈指示においては、NANはいわゆる「定性」を表すといえそうである。ただし、英語などの定冠詞と異なり、「定」である要素に義務的に付くわけではない。次の例を検討されたい。

(35) (物語「クレクレの話」の冒頭部分)

(a) *pada masa dulu, nta berapa ratus taun,*
LOC time before unknown how much hundred year

saman dunóng=ana,
time before = that

ada' sópó' tau, basingén Lalu=Kerékkuré,
exist one person named TITLE=Kerékkuré.

(b) *tedu ké' ina' pang' sópó' keban pang=Dadap*
live with mother at one field at=Dadap

(c) *Dadap=nan bakatokal pang=Brangkorong,*
Dadap=that is located at=Brangkorong.

(d) *antara Muér ké' Brangkorong, nya pang' Dadap=nan.*
Between Muir with Berangkorong 3 place Dadap=that

(a) (インドネシア語で) 昔々, 何百年前かわからないが²、昔々、ラル・クレクレ(*Lalu Kerékkuré*)という人がいた。

(b) 母親とDadapの果樹園の中に住んでいた。

(c) **そのDadap**は, **Brangkorong**にある。

(d) **そのDadap**はMuirと**Brangkorong**の間にある。 [LK001-004]

(35)では、二種類の地名を現わす名詞、*Dadap*と*Brangkorong*が現れている。いずれの名詞も二回以上現れているが、二回目以降の現れ方が二つの名詞の間で異なっている。*Dadap*

2 (a)の一行目はインドネシア語での発話である。話者は最初、外国人である聞き手(筆者)を意識してインドネシア語で語りはじめたが、途中で調査の趣旨を思い出したためか、スンバワ語で話を続けた。

を含む名詞句は、(b)で、はじめて提示されるときには、指示詞を含まない形で現れ、以降の発話(c)(d)では、指示詞*nan*を含んでいる。一方、*Brangkorong*は、はじめて文中に現れる(c)においても、二回目の(d)においても指示詞を含まない形で現れている。

一般に、*NAN*は一連の談話の中で話題として扱われており、それゆえ先行する内容への参照が特に有用である事物を指す部分に現れるということが予測される。(34)を含む物語において、*Dadap*は主人公が住んでいる場所で、物語中重要な地名であるが、*Brangkorong*はこの箇所で*Dadap*の地点を明らかにするために言及されている場所にすぎず、物語の以下の部分でさらに言及されることはない。(34)の二つの名詞の扱いの差は、物語全体の中での二つの地名の位置づけの差の反映であると考えられる。

4.3.3 MÉの文脈指示的用法

MÉは、その指示対象が、既に談話内に導入されている複数の対象の中にあるが、そのうちのどれであるかが話者にとって不確定である場合に用いられる。

(36) (a) *ada' telu' anak=salaki ku.*
 exist three child=male 1SG.LOW.AFFIX

(b) *démé dè=balong.*
 which nom=good.

- a. 「（結婚相手や働き手を探している人に）私には男の子が三人います。」
 b. 「**どの子**がよいですか。」

上記の例ではMÉの指示物の選択肢は先行する談話によって示されているが、MÉが常にそのような場合に用いられるとは限らない。たとえば、ある人物の出自（属する民族集団またはコミュニティなど）について尋ねる場合には、まえもって選択肢を導入することなく *tau=mé* 「どの人（相当する日本語に訳すとすれば「どこの人」または「何人」）とたずねる。このことから、MÉは指示物を含むセットが一般的知識などから限定されている場合にも用いられることがわかる。

4.4 TAの物語における用法

指示詞のうちTAは、物語など、話者が現実世界以外の場面を設定していることが話者と聞き手の間で了解されているような発話において、4.3.1-4.3.3で扱ってきたのとは異なる用法を持つ。具体的には、TAは、このような場合、話者自身が設定した場面の中心的存在を指す。

たとえば、4.3.1に示した例(30)(31)において、それぞれによって語られている場面の中心人物（(30)においては「母親」*ina=ta*、(31)においては候*datu=ta*）はTAによって表されている。

また、人物に限らず、語られている場面の中で中心的な役割を果たす名詞句は、TAによっ

て表されることが多い。そのことを示す典型的な例として、(37)に物語の一つ「ラナンマテの話」の冒頭部分を示す。（ここでは引用部分が長いので日本語訳のみを示す。対応するスンバワ語においてTAで現れている部分には下線部を引いた。）

(37)

[1] ラナン・マテ (*Lanangmaté=ta*) はわなを作った。

[2] わな (*bu=ta*) は、川でうなぎを取るためのものだ。

[3] しかし、ラナン・マテ (*Lanangmaté=ta*) は他の人と違っていた。

[4] 彼は乾いた土地の中にわなを置いた。

[5] 一晩して、朝、わな (*kodong=ta*) を見に行ったら。意外なことにわな (*bu=ta*) はシロアリで一杯だった。

[6] そこで、彼はシロアリ (*mentrènè=ta*) を取って箱の中に入れ、代替品として持っていった。わなはだめになってしまったので、彼は代替品としてシロアリ (*mentrènè=ta*) と交換した。

[7] シロアリ (*mentrènè=ta*) を持っていき、ある村に、鶏を飼っている一つの村に着いた。

[8] シロアリ (*mentrènè=ta*) を預けることにし、鶏の場所 (*pang' ayam=ta*) に置き、その場を離れた。戻ってみると意外なことにシロアリ (*mentrènè=ta*) は鶏に全部食べられていた。

[9] 彼は訴えた。「このように私のシロアリがなくなってしまったのだから、私は鶏 (*ayam=ta*) をもらおう。」彼は鶏 (*ayam=ta*) をもらった。

[10] 彼は遠くへと歩いていった。昔の人のことばを借りれば谷を下り、山をのぼりして、ある村に着いた。人が賑やかに米をついているのを見た。

[11] そこで鶏 (*ayam=ta*) を、米つき人のところ (*pang' tau=nuja=ta*) に預けた。

[12] どうしたことか米つき人の棒 (*dènèng tau=nuja=ta*) が倒れ、鶏 (*ayam=ta*) に当たり、鶏は死んでしまった。

[13] 鶏が死んだため、彼は「棒 (*dènèng=ta*) と取り替えてくれ」と訴えた。[LM 001-007]

ここでは、主人公のラナン・マテは常にTAで表されている。また、この部分には、主人公のラナン・マテが、わな、シロアリ、鶏、米つきの棒、の順でものを取り替えていく様子が描かれている。物語の筋において重要なそれらの事物も多くの場合TAで表されている。

この例からTAを含む名詞句は物語において、各場面において重要な役割を果たす事物を指すことがわかる。

(37)[1]は物語の冒頭であり、ここで主人公は初めて談話に導入されているにもかかわらずTAで表されている³。このことから、TAはNANと異なり、「定」の対象を指す機能を持つわけ

3 スンバワの物語では、通常は、登場人物は物語の最初の部分で「～がいた (*ada'....*)」という形で明確に導入される。(本稿に挙げた例のうち、(35)の(a)ではそのような導入が行われている)しかし、この例においては、そのような導入なしで話が始まっている。(これは、おそらくは、話者が物語を語るのに不慣れであったせいではないかと考えられる。)この点ではこの例はやや一般的ではない例である。

ではないことがわかる。

テキスト中には、TAとNANが同一の名詞句で共起する次のような例も確認されている。この例もTAが「定」を表示するNANとは別の原理で用いられていることの傍証となるだろう⁴。

- (38) *tapi batu=ta=nan tetap entèk kó' bao.*
 but stone=this=that constantly go.up to above

「しかしその（＋この）石は、休みなく上に伸びていった。」 [BL 084]

4.5 個々の指示詞の機能

既に見てきたように、指示詞は場面指示以外に「とき」を表す用法や文脈指示を表す用法を持つ。5つの指示詞のうちANA, MÉ, TÓ'の三つに関してはそれぞれの機能を比較的容易に一般化することができる。まず、これらについて以下に述べる。

ANAは[1] 発話場面において発話地点（話者）から遠い範囲(4.1)、[2] 発話時点から遠い時点(4.2)を指す。ANAの機能は基準点（発話地点、発話時点）からの距離が遠いことの標示であるといえるだろう。

MÉは、場面指示に用いられる場合(4.1)、時の単位を表す副詞句に現れる場合(4.2)、文脈指示に用いられる場合(4.3)がある。いずれの場合も指示物の候補はある程度限定されているが、候補中のどれが当該の事物であるのか特定されていない事物や状況を指す。

TÓ'の用法には、[1]発話場面において、話者に比較的近い領域から、話者から中程度の距離にある領域を指す。（ただし、話者に直接接する領域を除く。）(4.1)、[2]発話時点を指す(4.2)の二つがある。

[1][2]から、TÓ'は、発話の場そのものを指すのではないかと考えられる。この「発話の場」は、話し手と聞き手が視覚や聴覚を共有する、文字どおりの「発話場面」である場合もあれば、「この世の中」とでも呼べるようなより広く抽象的な場面である場合もあるのだと考えれば、[1][2]の両方の用例が説明できる。

4.3で示したように、TÓ'は文脈指示機能を持たない。これは、TÓ'の一次的意味が発話の場そのものを指す、場面指示的なものであることから説明できる。

また、4.1で示したように、TÓ'は話者に接している範囲（TAの指示領域）を指すことができない。また、TÓ'は発話の場から見えない範囲を指すこともできない。前者の制約が生じるのは、TÓ'が話者の存在する地点そのものでなく、それを含む広がりのある領域を発話の場として指すからだと考えれば説明できるだろう。また、後者の制約が生じるのはTÓ'の領域が「発話の場」としては捉えられないからであろうと考えられる。

このように考えると、TÓ'は話者からの距離を積極的に示すわけではなく、TÓ'が「中称」

4このような名詞句において、たとえば二つの指示詞の現れる順番に制約があるなど、二つの指示詞の統語的機能の違いが存在するかどうかについては未調査である。

であるのは、「発話の場」を指すというTÓ'の内在的性質から間接的に生じる事柄だと考えられる。

指示詞の主な機能として、一般に（通言語的に）、(i)基準点からの距離を示す機能と(ii)指示物と外界との結びつきを示すことによって、指示物に対する話者の関心を引く機能が指摘されている⁵。TÓ'は前者の機能を持たず、後者の機能のみを持つ要素であると考えられる。4.1で触れたように、場面指示においてTÓ'を用いる際、話者は常に指差しのジェスチャーを用いる。このことは、TÓ'が専ら後者の「注意を引く」という機能を担っていることと整合性を持つように思われる⁶。

指示詞TA, NANについては、それほど一般化が簡単ではない。それぞれについて、以下の4.5.1、4.5.2で述べる。

4.5.1 TA「基準点からの近接」

4.1～4.4で述べたように、TAの用法には以下のものがある。

- [1] 発話地点（話者のいる場所）に近接する範囲を指す。(4.1)
- [2] 発話時点を含む時点を表す。(4.2)
- [3] その発話を含む談話自体を指す。(4.3.1)
- [4] その発話に続く発話の内容を指す。(4.3.1)
- [5] 物語において、場面の中心に位置付けられている事物や人物を指す。(4.4)

[1]の場面指示的用法、[2]のときを表す用法、の2つを一般化すると、TAは発話地点・時点を基準点として、そこからの近接を表していると考えられることができる。

[3][4]に関しても同様に「基準点からの近接」という観点から説明が可能である。TAを含む文を含む一連の談話は、TAを含む文自体を基準とすれば、その文を含んでいるという点で基準点からの近接を表していると言えるだろう。[4]に関しても、TAを含む文の直後に現れる文は、TAを含む文に近接していると言えるので同様の観点からの説明が可能である⁷。

5 この二点を明確に指摘したものとしてはC.Lyons (1999:160)がある。C.LyonsはここでJ.Lyons (1977)のdeixisに関する論考をより明確な形で言い換える試みを行っており、J.Lyonsがともにdeixisというラベルを貼った上の(i)(ii)の二つの機能に関して、前者のみをdeixisと呼び、後者にostensionというラベルを貼ることによって明確に区別している。

6 このように考えると、(a)((=2))のような例におけるTÓ'は「ほら」あるいは「そら」と訳出するのが適当かもしれない。

(2) *tó'* *ada'* *pio*.
 there exist bird 「ほら（そこに）鳥がいる。」

7 ただし、このように考えると、次のような疑問が生じる。上で述べたように、当該の文の直後に発話される内容は、TAによって指示される。同様に、当該の文の直前に現れている内容もその文に近接しているという点からはTAによって指示されることが予測されるが、実際は、そのような内容は、TAによっては指示されない。(このような内容はNANによって表される。)この点は、TAが「基準点からの近接」を表すということからは説明できない。

一方、[5]の物語の中心を表す用法は、「基準点からの近接」という観点から直接説明することはできない。

[5]については次のように考えられるかもしれない。4.5のTÓ'にかんする議論で述べたように、直示的表現にはある基準点との位置関係を表す機能だけでなく、その指示物に対する聞き手の関心を向けるという機能もある。ここではTAは、主にこの機能を果たすために用いられているのである。つまり、物語の中心となる人や事物を指すのにTAが用いられるのは、話者の関心をその指示物に引きつけ、話の流れの理解を容易にするためだと考えられる。

場面指示において基準点（多くの場合話者）からの距離的近接を積極的に示すTAは、基準点からのその他の距離をあらわす指示詞より、話者の関心を引きつける度合いが高いと思われる。このことは、物語における用法において、他の指示詞ではなくTAが用いられていることとある程度関連しているように思われる。

4.5.2 NAN「定」

4.1 - 4.3で扱ったように、NANの用法には以下のものがある。

[1] 場面指示において基準点（話者）から中程度の距離にある状況、事物を示す。(4.1)

[2] 言語外的または言語内的情報によって聞き手が特定可能な「とき」を指す。(4.2)

[3] 先行する発話によって既に談話に導入されている事物を指す。(4.3)

このうち[2][3]の用法は定性の標示という観点から一般化できるが、この特徴と[1]の場面指示における中称の機能にみられる特徴の間には無視できない乖離がみられる。

4.1で示したNANおよびその他の指示詞の場面指示における指示範囲を以下にもう一度示す。

表9-3 指示詞の場面指示における指示範囲（表9-2の再掲）

近		TA	TÓ'	NAN	ANA
	話者に接する領域（身体、衣服、携帯物）		×	×	×
	話者から手の届く範囲				×
	発話の場から十分遠いと認識される領域	×			
遠	発話の場から見えない領域	×	×	×	

上に示したように、NANは話者に接する領域を指示することがない。この領域は、視覚的に聞き手と話者の間で共有されており、あきらかに「定」であるため、この領域がNANによって指示されないことは、NANを「定性」の標示機能と考えるだけでは説明できない⁸。このため、[1]にみられる中称の機能と、[2][3]にみられる定性の標示機能は統一的に扱うこと

8 一方、NANが発話の場から見えない領域を指示しないことは、「定性の標示」から説明できる。発話の場から見えない領域は、話者と聞き手の間で視覚的に共有されていないため「定」であると考えることができないからである。

のできない二つの別々の機能であるといえる。

この点を説明する方法として、[1]を基本的機能と考え、[2][3]をその拡張と考える方法と、逆に、[2][3]を基本的機能と考え、[1]をその拡張であると考えする方法の二つがあるだろう。

前者に関して言えば、基準点からの距離がより無標である指示詞が「定性」を標示する冠詞などに変化していくというプロセスは多くの言語で観察されている現象である。(38)のようにNANが指示詞TAと共起している例もあることから、文脈指示用法におけるNANは、文法的にも他の指示詞とは異なる範疇に属している可能性があり、この言語でも場面指示に用いられる要素から定性標示を行う要素への変化が進行したのだと考えることができる。

一方、NANの一次的機能は「定性」の標示で、中称の機能が二次的な機能であるとも考えることも可能であろう。話し手と聞き手が視覚を共有する場面における指示においては、基準点（話し手）からの距離の標示は重要な情報である。NANは本来は定性を標示する要素であるが、場面指示に用いられる場合に限っては、距離に関する情報を表し分けるといった伝達上の必要に合わせる形で中称の標示の機能を持つようになったのだと考えることもできる。（NANが中称として用いられるようになった理由には、他の距離を積極的に示す指示詞TA（近称）、ANA（遠称）の存在があると考えられる。）

5 まとめ

上で述べてきたように、本稿で扱ってきた指示詞は文法的には一つのカテゴリーを形成するが、その意味的機能は（おおまかに直示的内容を表すという共通点は持つもの）さまざまである。5つの指示詞は次の[A][B]の観点から意味的に分類することができる。

[A] 基準点からの距離を示すか

TA, NAN, ANAは（少なくとも用法の一つにおいては）基準点からの距離を示すが、TÓ', MÉは基準点からの距離を（少なくとも積極的に）示さない。

[B] 何らかの形の「定性」を示すか

NAN, MÉの使用は何らかの形の「定性」を示す。

NANは一般的な定性を、MÉはその指示物の候補となる複数の事物、状況が何らかの定性を持つグループの中に存在することを示す⁹。

9 MÉはその指示対象を特定しないという点で、意味的には疑問名詞*apa*「何」、*sai*「誰」や疑問副詞*pidan*「いつ」などと同様、疑問詞のカテゴリーを形成しているといえる。